



国宝 風神雷神図屏風 俵屋宗達筆(京都・建仁寺蔵)より

## 第1号：平成26年5月1日 琳派と御所 プロローグ

今、自然災害だと普通に考える台風や雷を恐れてきたのが我々の祖先です。落雷を菅原道真の祟りと考え、北野天満宮を建立し、さらに学問の神様としてさえも神頼みをするようになりました。東山の蓮華王院・三十三間堂では木彫の風神雷神が怖そうな顔をして見下ろしています。このような神様をユーモラスに表現して見せたのが俵屋宗達です。金箔の上に緑青をつかった風神の姿はまるでランニング選手のように風に乗って走る。空中に浮かんでいるのです。黒雲も薄く風を含んだ袋が落下傘にもみえてきます。風速計では計ることができないような速さの一瞬を捉えています。

雷神はどうでしょう。空中でぐっと踏ん張って、稲妻を走らせる方向を睨み、その白い体躯は山門にいる仁王像のように筋骨隆々としています。その牙を剥き出した顔は風神と同じように団子鼻で恐ろしさを消し去ってしまい、どこか可愛らしささえ感じることができます。

この世のものではない神の姿を親しみを感じさせる画面に創り上げた宗達を後水尾天皇は気に入って、宗達の屏風を手許において愉しんでいました。では、どうして宗達はこのような画面を創り出せることができたのでしょうか？ここに琳派の秘密があると考えられます。それは笑いの世界だといえるのではないのでしょうか。宗達を始め琳派の作家には独自の笑い、ユーモアが存在します。

「琳派と御所」をテーマで連載してゆく予定ですが、両者の関係は深く、琳派を考える上で欠くことが出来ないのが御所です。次回は「琳派誕生」ご期待ください。

「琳派」を捉える視点として、お勧めしたいのが淡交社版の小林太市郎著作集6です。

